河川紀行 Vol.6

人間に使われてきた川が
今は人々に愛され、生まれ変わっています。

遠賀川（おんががわ）

遠賀川は、福岡県馬見山（うまみやま）に源を発し、
穂波川、彦山川、犬鳴川、笹尾川などと合流しながら、
直方平野を流れて響灘（ひびきなだ）に注ぐ、
全長61km、流域面積1，026平方キロメートルの一級河川です。
その水は、かんがい用水、水道用水、工業用水として、
6市26町村、約67万人の暮らしを支えています。

次へ

［遠賀川水辺館のご案内］

福岡県直方市溝堀1-1-1　TEL 0949-22-1810
開館時間／10:00～18:00
休館日／毎週月曜日、月曜祝日の場合は火曜日、年末年始
入館無料、イベント参加には有料と無料があります。

遠賀川の呼び名

川の呼び名は地域や時代によって変わります。「遠賀」は「岡縣（おかのあがた）」という郡名の岡が変化したものです。
遠賀郡が周辺の牧場の多さから御牧（みまき）郡と呼ばれていた時代は、遠賀川も御牧川と呼ばれていました。芦屋町の御牧橋などの名称はこの頃の名残りです。
この御牧郡は寛文４年（1664）に元の遠賀郡に戻すように藩より命令がありました。

遠賀川水辺館（川と自然環境の体験学習施設）

平成16年10月、福岡県直方市に新しくオープンした「遠賀川水辺館」。地域の人々と遠賀川との交流拠点として幅広く利用できるようにと、住民のさまざまな意見を取り入れて完成しました。館内の水槽には遠賀川に棲む魚たちが泳ぎ、目の前をゆったりと流れる川の様子を存分に眺めることができます。また、遠賀川リバーチャレンジスクールや川とまちの勉強会など週末を中心に開催されるいろいろなイベントでは、みんなが楽しみながら川を学んでいます。

閉じる

河川紀行 Vol.6 遠賀川

人物でたどる遠賀川の流域

次へ

長政の思いが、堀川運河の始まり

江戸時代、黒田藩によってまとめられた書物に『筑前国続風土記』があります。これは嘉摩、穂波、遠賀、鞍手といった遠賀川流域の風土や歴史などを詳しく紹介したものです。その中で遠賀川は、「國第一の大河なり」と紹介されています。いくつもの支流を従えて、広大な平野を悠々と流れる様は、当時の人々に強烈な印象を与えたのでしょう。一方で同じ『筑前国続風土記』に「土地ひきく（低く）大河流れて水害多し」とも記されています。海と土地の高低差が少ない遠賀川は、少しの雨でもすぐに氾濫し、大きな災害をもたらしていたからです。

こうした遠賀川流域を、もっと豊かな穀倉地帯に変えようとしたのが黒田長政です。長政は「新しい運河を掘って遠賀川の水を洞の海（洞海湾）に導けば洪水も減り、米の収穫量も増え、船でものを運ぶにも便利になる」と思い、治水工事を計画、元和7年（1621）から水路の工事に取りかかりました。これが堀川運河の始まりでした。しかし元和9年（1623）、長政の死去により工事が中止になりました。次ぎの工事再開まで、その後128年も待つことになります。

子等を思う歌・歌碑（稲築町）

山上憶良（やまのうえのおくら）660～？

「銀（しろがね）も黄金（こがね）も玉も何せむに勝れる宝子にしかめやも」。

筑前の国司となった山上憶良が、視察の途中立ち寄った嘉麻郡で詠んだという「子等を思ふ歌」です。「金銀宝石が何になる、子供ほどの宝がこの世にあろうか」という意味で暖かい愛情に溢れています。当時の嘉麻郡の郡家（ごうけ）は現在の稲築町にあったとされ「子等を思ふ歌」の歌碑が稲築公園に建てられています。

足利尊氏（あしかがたかうじ）1305～1358

後醍醐天皇の新政権に反旗をひるがえした尊氏でしたが、北畠の軍に破れ九州へと敗走しました。

筑前の多々良浜に着いたときはわずか500人足らずだった尊氏の軍勢は、次第に勢いを取り戻しやがて京へと攻め入ります。この時、九州の拠点となったのが赤池町の興国寺あたりです。

豊臣秀吉（とよとみひでよし）1537～1598

明智光秀を破った豊臣秀吉が天下平定に向けて動き出します。九州の島津征伐に向かったのが天正15年（1587）の頃。このとき島津氏と結んで古処山（こしょざん）に立てこもっていたのが秋月種実（あきづきたねざね）です。種実は秀吉の軍を怖れてすぐに降伏してしまいます。

古処山は、遠賀川の源流がある馬見山や屏山（へいざん）とともに嘉穂地方の三山として知られ、秋月攻めの時の史跡が残っています。▲ 古処山 ●豊臣秀吉

黒田長政（くろだながまさ）1568～1623

長政は、豊臣秀吉につかえた黒田如水の長男ですが、関が原の合戦で徳川方に加勢し、その見返りに筑前52万石を与えられ慶長5年（1600）に入国しました。

長政は城を構え町には福岡と名付けました。

筑前が52万石というのは表向きで実際はそれより少なく。そこで長政は石高を増やすために新田開発を思いつき、目をつけたのが広い平野を持つ遠賀川流域だったのです。後に長政はこの地の水害をなくすために、治水（ちすい）に打ち込むことになります。

戻る

閉じる

河川紀行 Vol.6 遠賀川

遠賀川に鮭を呼び戻す

遠賀川流域の自然

遠賀川の支流のひとつ彦山川をさかのぼると、北部九州で最も高い山、英彦山がそびえます。
元は「日子山」と書かれていました。これは天照大神の子である天忍骨命（あまのおしほにのみこと）が降臨した、つまり太陽の子が降り立ったという言い伝えがあったからです。
英彦山の山伏たちは秋になると英彦山を下り福智山に登って修行し、再び英彦山に帰ります。このことは「秋の峰入り」と呼ばれています。この峰入りによって開かれた福智山は現在、九州国定公園としてハイキングロードなどもあり、竜王峡など名所も多く、美しい山として親しまれています。
また福智山は、響灘に注ぐ遠賀川の悠々とした流れや緑の平野を見渡すことができることから、国見山（くにみやま）とも言われています。

遠賀川と鮭

昭和初期から炭鉱の最盛期だった30年代まで、遠賀川は黒い川と呼ばれていました。
その遠賀川を、鮭ののぼる川としてよみがえらそうと、「遠賀川に鮭を呼び戻す会」を創り、鮭の稚魚を放流した方が嘉穂町大隈で酒造業を営んでいた大里叶（おおさとかのう）さんです。
遠賀川上流、嘉穂町では毎年3月になると、鮭の放流が行われます。
バケツを持った小学生たちが稚魚を放ち大きくなって帰ってこいよと声をかけ、稚魚たちの長い旅が始まるのです。

大里 叶氏

※上の魚マークを押すと、その場所に主にすんでいる魚の画像がご覧いただけます。

鮭神社

嘉穂町大隈には鮭神社があります。その境内には鮭塚があり、のぼってきた鮭を神の使いとして大切にして豊作を祈りこの鮭塚に埋める献鮭祭（けんけいさい）が行われます。この献鮭祭は、記録にあるだけでも明和元年（1764）から続いている祭りです。

●鮭神社

昭和初期までは鮭の姿も見られた遠賀川も、石炭産業が盛んになるにつれ、川の水は汚れ、その姿は消えてしまいました。献鮭祭でも鮭の代わりに大根を埋めていたそうです。
それが昭和53年に水巻町で40年ぶりに鮭が発見されたことから、鮭神社の氏子をはじめ流域の人々から「鮭が戻ってくるほど水がきれいになった」と喜ばれ、その思いは、昭和61年から稚魚の放流が各地で始まり、鮭が遠賀川に帰ってくるようになりました。

献鮭祭

鮭神社

戻る
閉じる

河川紀行 Vol.6 遠賀川

遠賀川のこと

渕上 信好
ふちがみ のぶよし

私の川は遠賀川である。福岡県の中央から北部へ流れている。私が生まれたのは、その真ん中の筑豊盆地なので、川はゆっくり流れていた。セイタカアワダチソウの黄色と、黒い水が、なんとなくきれいだった。黒い水は、洗炭水といって石炭を洗った後の、言わば米の研ぎ汁のようなものである。

私たちは、この石炭の研ぎ汁の中に入って遊んだ。確かに汚いのだが、フナもカマツカもいたし、ズボッとはまる足元の泥で、「おはぎ」のような団子も作れた。担任の先生が「昔は、川底まで透き通っていて、アユがいっぱいおった」というのだが、別の川の話をしているようで信じてはいなかった。台風の時、同じ小学校の子供が溺れて死んだ。その夜は怖くて眠れなかったが、一ケ月もすれば、また川に入っていた。↙

今の遠賀川とは違って、川の水はなかなか引かず、高水敷と呼ばれる陸地には、何日も水があった。土手から眺めていると、大きなコイが背びれを出して、サイクリングロードを走っていた。その後をオッサンが追いかけていた。よく見ると、さっきまで体育の授業をしていたA先生だった。今の時代なら、高水敷に取り残された魚を救出しているようにも思えるが、その鬼のような形相から「きっと、食べるとバイ」と私たちは信じて疑わなかった。

私たちが過ごした遠賀川は、決して今、河川環境を学習している子供達が羨ましがるような、きれいな水ではなかった。もちろん、石炭産業に無関係の上流や支流は、きれいな水が流れていたが、私たちの住むまちの遠賀川は、大人達から愛されていなかったと思う。しかし、私たちの川は、この川だったし、どんなに真っ黒でも、水が溢れようとも楽しかった。

時代は1970年、大阪で万国博覧会が開催された。私は小学5年生。遠賀川は石炭産業の衰退と共に、洗炭水から生活雑排水の汚染へと変化していった。人類だけの進歩と調和の勢いがあった。

中学生になると、クラブ活動に熱中し川遊びから離れていった。学校は堤防の側にあって時々浸かった。校庭が湖になると休校になった。なんだか得したような気になった。長靴の中に入ってくる水の感触は、慣れると快感になり、みんなグチョグチョいわせながら帰った。水が引くと保険所の人がやって来て、消毒薬を散布した。この時になって、「トイレの排泄物(当時は水洗ではない)はどうなったんだろう」とか、家庭が浸水して困っている人の事を思った。↗

あれから30年、少々の雨では溢れることはなく、単位面積当たりに多様な生物が住むような整備も進んできた。子供達が安全に遊べる水辺も作られている。しかし、どこか違っている。私たちは、変化する河川環境にすがるようにして生きている河川生物の一部だったような気がする。こう思うのは、私が既にヤゴから羽化してしまったせいだろうか。

ボタ山

渕上 信好
1958年生まれ。飯塚市在住。
国土交通省(委嘱)遠賀川河川環境保全モニター。
◆主な著書
福岡県レッドデータブック2001(共著)
魚オヤジの遠賀川魚ガイド(国土交通省発行)

河川紀行：発行／福岡県河川協会
http://www.fukuoka-pref-kasen.jp/kasenkyokai
info@fukuoka-pref-kasen.jp

戻る
閉じる